

条件構文の談話標識化の諸相

藤井 聖子 (東京大学大学院総合文化研究科)

Conditional Constructions Used as Discourse Markers

Seiko Fujii (Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo)

1. はじめに

日本語の条件構文は、「(れ)ば」「たら」「なら」「と」「ても」「ては」等の節接続形態素を含む従属節と主節とが複文を形成する生産的構文である一方、発話冒頭ポジションで、「とすれば」「だったら」「なら」「すると」「とすると」等文頭接続詞的に用いられ、「例えば」「言ってみれば」「よかったら」「可能なら」「本来なら」「どちらかという」と「要約すると」等ある語彙とともに定型的に副詞的に用いられ、談話標識化・語用標識化している用法もある。本発表では、このような条件構文基盤の談話標識化の諸相を探索吟味しつつ、書き言葉コーパス・話し言葉コーパスを用いてこれらの現象を分析する際必要となる指標や類型を考察する。

2. 語用標識・談話標識、そして、語用標識化・談話標識化

ここで取り上げる「談話標識」は、Schiffrin (1987) の discourse markers に関する見解・理論に依拠する。Schiffrin (1987) は、談話においてトーク'talk'という単位を見いだした上で、discourse markers を、談話の中でトーク'talk'の単位を区切る連鎖依存の要素と操作的に定義付けている。発話先頭・発話末の標識が前方照応あるいは後方照応しつつトーク'talk'単位を括り、談話の意味展開の結束性に寄与する標識である。Schiffrin (1987)がその典型的事例として着目したのが、英語では、oh, well, now や so, because, and, but, or, y'know 等である。日本語では、「ああ」「あら」「あれ」「まあ」等いわゆる間投詞といわれてきた類のものや「だから」「だって」「で」「でも」「だけど」「或は」等いわゆる接続語といわれる結束性標識語がその典型的な類例である。

談話における同種の現象に関して、Schiffrin (1987) の discourse marker 以外にも、discourse particle 等他の概念・理論や用語が提示されてきていたが、談話標識 discourse marker や discourse particle 等という範疇も含むより包括的かつ一般化可能な概念・範疇として、Fraser (1996)が語用標識(pragmatic markers)という概念・用語を提案し、語用標識(pragmatic markers)の類型・細分化を提案した。Fraser による語用標識の体系付けの中で、談話標識(discourse markers)を語用標識(pragmatic markers)の一種として位置づけることができる。本研究で扱う現象は、基本的対象としては談話標識であり Schiffrin によるその定義に適合するものであるが、狭義の談話標識の域を越えて語用標識の他の類としての機能を呈するものも含まれる。

このような語用標識・談話標識は、ほとんどの場合、元々そのための語として存在していたというより、他の統語的特徴・意味・機能をもつ語(多くの場合他の品詞・文法範疇)や語の組み合わせが談話の相互行為の中で繰り返し使用される中で、形式と語用的機能との結びつきが顕著になり定着化したものが多い。このような現象を、広く pragmaticalization 「語用(論)化」と捉える理論や通時・共時的事例研究が英語・日本語を含む多くの言語で展開してきていた (Traugott & Heine 1991, Traugott 2004 等, Onodera 1995 等, 他)。藤井(2008 ; 科研課題 2006-2009)では、このような pragmaticalization を射程に、「内容語から文法的機能語へという文法化プロセスのさらに先に生じてくる現象、すなわち文法的機能語が本来の統語的特質を多少薄め、転じてより語用的機能を強化して語用標識に転化していく現象」を、文法的機能語の「語用標識化」と呼んだ。本研究でもこの意味で、「語用標識化」という概念・用語を用い、特にその一種 (Fraser 1996 による語用標識の類型と包含関係に基づく)として発話冒頭ポジションで談話結束性や発話の手続き的意味の表象に寄与し談話標識的機能が定着化していくありさまを「談話標識化」と呼ぶ。

前述のpragmaticalization 「語用(論)化」の研究では、多くの言語で、発話左端(発話冒頭)或は発話右端(発話末)で語用化が生じやすいことが示されている。日本語もこの例に漏れず、日

本語の条件構文においても、発話左端（発話冒頭）或は発話右端（発話末）が語用標識化・談話標識化の温床となり易くなっている。発話右端（発話末）ポジションにおいては、助言・提言の発話機能を呈する「～ば↑」「～たら↑」で完了する構文や、当為的「義務」機能を呈する「～ないと」「～なければ」「～なきゃ」「～なくては」「～なくちゃ」で完了する構文等、本来従属節である条件構文の前件節が単独で独立節構文として用いられ語用標識化しているケース（この場合狭義の「談話標識」とは別の類型）がみられる。本稿が着目するのは、逆に発話左端（発話冒頭）で条件接続形態素を含む条件構文(の一部)が、語用標識化・談話標識化している現象である。

3. 日本語の条件構文の語用標識化・談話標識化：構文の形式的特徴に関する類型

日本語の条件構文の語用標識化・談話標識化の探求を目的にして、コーパスに分析用コーディングをする場合、まず構文の形式的特徴に関する作業類型として、「拘束形態素の非拘束化型」「指示詞照応型」「動詞等述語を含む合成型」という類別が少なくとも必要である。

なお、それ以前に必須の基礎的な形式指標は、当然、「(れ)ば」「たら」「なら」「と」等のうちどの接続形態素を用いているか、という明確な形態上のバリエーションであり、その接続形態素と意味・機能との相関・選好性(または制約)の有無が研究問題になるわけであるが、接続形態素という指標に関しては明確であるのでここでは割愛する。

3.1 拘束形態素の非拘束化型

本来拘束形態素(bound morpheme)である形態素が自由形態素的な振る舞いをし、文頭接続語化しているものが筆頭に挙がる。因果関係や逆接・譲歩等の意味範疇では、馴染み深い「だから」「だって」「で」「でも」「だが」等、殆どの一般的国語辞書にも語彙項目としてたてられているほど語彙化している接続語の類である。この類には、明確に語彙化していると考えられるものもあれば、談話の中で使用され新奇性を強く感じさせるものもある。¹

条件関係の意味範疇では、「ならば」「だったら」「でしたら」「だとしたら」「だと」「ですと」「と」「なら」「では」「じゃ」等が発話冒頭で使われていることがコーパスで認められる。これらの発話冒頭での使用は、(その表現が語彙化していると見なされるかどうかは別にして²、少なくともその成り立ち・構成として)本来拘束形態素として用いられる判断詞「だ」や接続形態素(「と」等)が、発話冒頭でむき出しで自由形態素的に使用されている。本来拘束形態素である形態素が発話冒頭(左端位置)に出現することで、発話連鎖依存性を強く感じさせる標識である。

- (1) 「そうか! なら、そっちも手伝ってやるぜ」 BCCWJ 書籍:文学:LBh9_00051b
- (2) 『『聖なる石』が欠けたことが、異変の原因なのだろうか… だとしたら 政堂へはどのように報告をすればよいものやら…」 BCCWJ 書籍:文学:LBg9_00072b

これらの使用の中には、(1)(2)のように同じ話者による発話冒頭の場合と、(3)(4)のように話者交代後に別の話者が先の話者の発話を受ける場合とがある。また次項(5)のように(形式的には、次項3.2「指示詞照応型」の用例だが)同じ話者による発話冒頭ではあるものの、先行発話が他者の引用であり、他者引用を照応している用法もある。

- (3) 「だったら、早くそれをいってください！」 書籍:文学:LBm9_00145b
- (4) 447. SJ5: ato= piano o hiku koto ka na ?
448. SJ5: piano .
449. TJ5: piano nai zyan .
450. SJ5: kiiboodo ga aru zyan .
451. TJ5: hiiteru ?

¹ 世代や時代によって受け止め方に差はあるものの、例えば、発話冒頭で用いられる「だもんで」「なもんで」(Fujii 2000)は、後者(新奇性を感じさせる談話標識化途上の事例)にあたるだろう。

² 現行 BCCWJ では、「だったら」「では」「じゃ」「だと」は「接続詞」長単位・語彙素としての登録がある一方、その他に関しては(「でしたら」「なら」等も含め)構形成態素それぞれの短単位情報(および活用形)に留まり、その活用形自体が語彙化しているという判断での登録はないようだ。

- 452. SJ5: hiiteru yo .
- 453. TJ5: watasi mita koto nai .
- 454. TJ5: Ikkai mo .
- 455. SJ5: tama ni hiku mon .
- => 456. TJ5: aa zyaa kondo kikasete morawanakya . ああじゃ今度きかせてもらわなきゃ .
- 457. SJ5: e .
- 458. SJ5: e he he he he .
- 459. TJ5: nori umai no ?
- 460. SJ5: iya umaku-

(Fujii 1995-1997)

話者間・話者内いずれの場合も、「なら」「だとしたら」「だったら」「じゃ」が先行発話を照応し、その先行発話の事態を前提にして後続発話での発話行為を行っていることを示す標識として機能している。その他（「S とすると S」「S となると S」「S とすれば S」等複合辞条件構文に依拠する）「とすると」「だ」とすると」「となると」等の使用も広汎に認められた。(表1 参照。)

表 1. 発話冒頭で用いられる条件構文基盤の談話標識 (一部) : 拘束形態素の非拘束化型「だったら」「なら」「とすると」「だ」とすると; 指示詞照応型「そうだとすると」 [BCCWJ]

	文頭「だったら」		文頭「なら」		文頭「とすると」		文頭「だ」とすると		文頭「そうだとすると」	
	916		477		269		137		101	
		ジャンル	R	G	R	G	R	G	R	G
レジスター										
出版・雑誌	37		27		4		3		1	
出版・書籍	299	0 総記 2	121	2	73	3	35	1	21	1
		1 哲学 13		4		3		0		3
		2 歴史 8		6		7		2		0
		3 社会科学 22		20		11		5		10
		4 自然科学 1		6		6		0		0
		5 技術・工学 4		3		5		0		1
		6 産業 3		4		2		0		1
		7 芸術・美術 9		6		8		0		0
		8 言語 2		3		2		2		0
		9 文学 229		62		25		25		5
		分類なし 6		5		1		0		0
出版・新聞	0		4		1		1		0	
図書館・書籍	285	0 総記 1	141	1	139	0	52	0	45	0
		1 哲学 11		6		7		6		3
		2 歴史 3		7		13		0		5
		3 社会科学 21		15		25		5		10
		4 自然科学 2		6		7		2		4
		5 技術・工学 5		5		2		1		1
		6 産業 7		2		3		0		1
		7 芸術・美術 9		4		3		0		1
		8 言語 0		1		5		0		2
		9 文学 210		86		67		36		16
		分類なし 16		8		5		2		2
特定目的・ブログ	83		63		11		4		2	
特定目的・ベストセ	51		15		27		4		6	
特定目的・教科書	0		1		2		0		0	
特定目的・国会会議	11		11		3		8		17	
特定目的・知恵袋	150		94		9		30		9	
特定目的・白書	0		0		0		0		0	
特定目的・法律	0		0		0		0		0	
特定目的・広報誌	0		0		0		0		0	
	916		477		269		137		101	

3.2 指示詞照応型

拘束形態素に加えて「そう」等の指示詞が共起して談話の前方照応をしつつ、ある指示詞と接続形態素との組み合わせが談話標識化している類が頻繁に用いられている(例: 5, 6, 7)。3.1.の「拘束形態素の非拘束化型」として出現するものは、「そうならば」「そうだったら」「それだったら」「そうでしたら」「そうだと」「そうなら(そんなら)」「それでは」「それじゃ」「そうだとしたら」「そうだとすれば」「そういうことなら」等、指示詞共起の指示詞照応型の発話冒頭での使用が認められた。

(5) フン、なに…千葉先生もこの梅太郎を叱っていたと… そんなら、その先生の娘が、お前などは相手にせず、この梅太郎を慕っている事実はどう解釈する? 書籍:文学:LBa9_00025b

(6) そうだとしたら こんなにお化粧して香水をふりかけたりするのでしょうか。書籍:文学:LBk9_00058b

- (7) 171 *I57: nizyuusanniti made.
 172 *S57: un.
 173 *I57: +, zyuuroku kara nizyuusan made de sa.
 174 *I57: +, sono ato dooyuu huu ni yaru no ka na?
 175 *S57: iya yokuwakannai kedo.
 176 *S57: ma zyuuroku kara nizyuusan made wa.
 177 *I57: yannai desyo?
 178 *S57: zissyuren mitaina kanzi desyo.
 179 *I57: sono ato doo suru no ka na?
 180 *I57: ## hayaku kimetehosii yo na.
 181 *S57: a nanka zysii no gassyuku toka aru no?
 182 *I57: un.â
 183 *I57: ikitai n da. [=! laughing]
 => 184 *S57: maa sore dattara ii n zyanai no? まあ それ だったら いい ん じゃないの?
 185 *I57: e?
 186 *I57: ii ka na?
 187 *S57: un.
 188 *S57: ma hatigatu toka da to tyotto mazui kamo sirenai kedo.
 190 *I57: un. (Fuji 1995-1997)

談話標識化プロセスについては、共時的データの分析に基づく一般化は避けるべきだが、「そうなら」「それなら」の使用基盤から「なら」へ、「そうだとしたら」の使用基盤から「だとしたら」へ、「そうすると」の使用基盤から「すると」へ、というふうに、合成的な指示詞照応型の談話での使用が拘束形態素の発話冒頭での非拘束の新奇使用の基盤となり、拘束形態素の非拘束化の基盤となっているという仮説が妥当であろう。従って、共時コーパスの分析で作業仮説としているのは、「拘束形態素の非拘束化型の使用が観察される場合は、その談話標識に対応しその基盤構文となる指示詞照応型が可能であり使用されている」という仮説である。

この指示詞照応型に参与する指示詞はソ系が最も広汎に使用されている。定着化・慣用性・語彙化度が相対的に強い「そうしたら」「そしたら」等もソ系である。意味機能的にソ系のみで可能なもの(例:「そういえば」)もある一方、コ系やア系も出現可能な意味文脈・談話標識もある。ソ系のみでなくコ系での使用が顕著なのが、「これでいくと」「こうなると」等である(「そうなると」も勿論使用されている)。ソ系かコ系かに関しては、5節において後述の「発話(間相互行為)における条件付けの仕方」によって動機付けられている変容であると考えられる。

3.3 動詞等述語を含む合成型

内容述語の条件形が軸となる合成型も広汎に使われている。「具体的にいえば」「言ってみれば」「あえて言えば」「言い換えれば」「詳しく言えば」「なぜかと言えば」「正直にいうと」「まとめると」「例えていうなら」「さらにいうなら」「極言すれば」「極論すれば」「補足すれば」等、ある語彙とともに副詞的に用いられ(ある程度)定型的な条件表現の使用がコーパスで多種認め

られる(表2参照)。(「よかったら」「よろしければ」における形容詞等、動詞以外の体言述語が含まれる場合も、この類型の細分とみなす。)自立語・動詞等を含み(3.1でみた拘束形態素の非拘束化型等と異なり)拘束形態素がむき出しで発話されるわけではなく、内容述語の条件形を基軸に一応節を形成しており、語彙化した談話標識に比べると通常の生産的条件複文により近い。(BCCWJ, CSJからの用例抜粋を、4節の(11)(12)(13)に示す。)

とはいえ、ある語彙群とともに使われ(ある程度)定型的であることに加え、その述語の項が(主語も含めゼロになっていること自体は日本語に一般的であるが)特定の指示をもつ特定ゼロ照応(definite null instantiation)ではなく、不定的(indefinite null instantiation)或は文脈指示であることが多い。また、談話標識としての用法では、項を明示的に補っても適切な同機能の発話にはならないことから、文脈において指示認識可能な項がゼロ照応になっていると考えるより項の指示性自体が希薄化していると考えられる。さらに、次節以降でみるように機能的特徴をもつ。

4. 発話内の機能的特徴

4.1 基盤条件構文の「事態把握領域」による類型

以上みたような種類の条件前件表現が発話冒頭で使われる際、その発話内での機能に関しても特徴がある。発話内での機能(その機能ラベリングの一つ)の明確化のために、基盤条件構文の「事態把握領域」による類型を援用した。Sweetser(1990)は、条件文が異なる「言語概念レベル」・「事態把握領域」において表象・解釈されることを指摘し、内容レベルの事態把握領域、認識レベルの事態把握領域、発話行為レベルの事態把握領域において、内容的条件文(例: 8)のみでなく非内容的条件文が可能であることを示した。後者の非内容的条件文には、認識レベルでは(9)のような認識条件文、発話行為レベルでは(10)のような発話行為条件文等がある(藤井 2012 参照)。

- (i) 内容(Content)レベル (8) 名医が早期に手術をすれば、きっと良くなるだろう。
- (ii) 認識レベル(Epistemic) (9) 良くなったのなら、きっと名医が早期に手術したのだろう。
- (iii) 発話行為(Speech Act)レベル
(10) 手術をご検討でしたら、こちらに可能医療機関と医師のリストがあります。

このような事態把握領域による条件文の類型に鑑みて、談話標識・語用標識的な用例を分析すると、内容的条件文(予測的条件文)もみられるが、非内容的条件文(非予測的条件文)が多く、発話行為条件文の類や、認識条件文・メタ言語条件文の特性を呈する類が多いことが分かった。先に3.1節において「なら」「だとしたら」「だったら」「じゃ」が、3.2節において「そんなら」「そうだとしたら」「それだったら」が、談話における先行発話を照応し、その先行発話の事態を前提にして後続発話での発話行為を行っていることを示す標識として機能していることをみた。その発話行為の様相に変容はあれ、概ね発話行為条件文としての特色を共有している。

- (11) 簡単に言うと、円レートが上昇すると、外貨建ての輸出価格は上昇し([括弧内省略])、輸出数量は、減少する。BCCWJ_OW:OW4X_00505b
- (12) 白状すれば、わたしも彼女にはひかれていた。(書籍: 文学: LBe9_00203b)
- (13) したがって悲しい出来事。ということで。(F え)お話しする場合に。あまり私自身(F えー)残ってないんですが。強いて(F えー)言えば。長いこと(F おー)飼ってた(F あー)犬が。(F あー)老衰で死んだと。いうことを思い出して。(CSJ2004: S02M1698)

4.2 非内容的条件構文の機能細目

日本語の非内容的条件文のこれらの用例を分析するために、Speech act modifiers, Rhetorical connectors (Fujii 1993, 1994, etc.) などの機能細目を用いてきた。「はっきり言えば」「正直言うと」「何を言いたいかという」「本音をいえば」「本当のことをいえば」「どっちかといええ」「白状すれば」(例 12)等は、発話に発話者自ら註釈付与をしつつ条件付きの発話・発話行為を行うための談話標識としても使われている(Speech act modifiers 発話行為調節標識)。

「要約すると」「簡単に言うと」(例 11)「言い換えれば」「さらに言えば」「詳しく言えば」「結

論をいえば」「より正確に言う」と等も同様に発話行為の条件付けに寄与するが、同時に談話構造の中での結束性指標や発話間関係の手續きの意味に寄与している。「この立場でいくと、…となる」「…比べると、…」等、表現上内容的条件文の論理構造を帯びている場合も、前件で談話での論旨展開上の条件付けをし、後件でその見地・視点・立場での結論を述べる発話であり、認識条件文と発話行為条件文とメタ言語的条件文との折衷バリエーションであると捉えられる。

表2 語用標識・談話標識として用いられる条件構文：述語を含む合成型(一部例) [BCCWJ]

		と	(れ) ば	たら	なら
speech act modifier 発話行為調節	B C C W J	「...言えば」系 「ほんという」と 「じつをいう」と 「本心をいう」と	「...言えば」系 「実をいえば」 「(もっと)はっきりいえば」 「早くいえば」 「遠慮なくいえば」 「あえて言えば」 「言ってみれば」 「正直言えば」 「本音をいえば」 「本当のことをいえば」 「ほんをいえば」 「告白すれば」 「極言すれば」 「極論すれば」等		
⇕ {相互排他的な 特質で表す}		「率直にいうと」 「あえていうと」 「正直言う」と 「本音をいうと」 「本当のことをいうと」 「告白すると」 「極言すると」 「極論すると」等	「あえて言えば」 「言ってみれば」 「正直言えば」 「本音をいえば」 「本当のことをいえば」 「ほんをいえば」 「白状すれば」 「極言すれば」 「極論すれば」等		「敢えていうなら」
	meta-linguistic marker メタ言語的	「簡単にいうと」 「一口にいうと」 「どちらかといえは」 「まとめていうと」 (その)概要を述べると 参考まで述べると	「言い換えれば」 「さらに言えは」 「詳しく言えは」 「概していえば」 「大きいいえば」 「結論をいえば」 「例していえば」 「わかりやすいいえば」 もっと分かりやすいいえば	「簡単にいつたら」 「率直にいつたら」	「例えていうなら」 「ついでにいうなら」 「さらにいうなら」 「なぜなら」
⇕ {相互排他的な 特質で表す}	rhetorical connector 修辞連結的	「ついでにいうと」 「何かという」と 【 】かといえは 「なぜかという」と 「その意味でいうと」 【 】かというと 「...比べると」	「結論をいえば」 「例していえば」 「わかりやすいいえば」 もっと分かりやすいいえば 「補足すれば」 【 】かといえは 「なぜかと言えは」 「それはなぜかといえは」 「どちらかと言えは」 【TOPIC】といえは	「簡単にいつたら」 「率直にいつたら」 【TOPIC】 ときたら	「なぜなら」 「常識的に考えるなら」 【TOPIC】なら
	perspective-taking marker 視点・観点設定	B C C W J	「 [スライド,図,表等] をみると」 【TOPIC】というと 【TOPIC】について触れると 【TOPIC】を参考まで述べると 「これでいくと」 「この立場でいくと」 「この立場でいうと」	「補足すれば」 【 】かといえは 「なぜかと言えは」 「それはなぜかといえは」 「どちらかと言えは」 【TOPIC】といえは	【TOPIC】 ときたら
evidential marker 証拠生ソース表示		Xによると 【一人称】にしてみると: 「私にしてみると」「僕らにしてみると」 【三人称】に言わせると	Xによれば 【一人称】にしてみれば: 「私にしてみれば」「僕らにしてみれば」 【三人称】に言わせれば		
speech act modifier 発話行為調節	C S J	【 】かというと 【TOPIC】っていうと 「いってしまうと」 「厳しく言う」と 「そういう点でいうと」等	「敢えていえば」 「(簡単に)いってしまえば」 【 】かといえは 【TOPIC】といえは、等		「添えるなら」 <CSJ 例：割愛 (スライドをご覧ください)>

5. 発話(間)相互行為における条件付けの仕方に関する類型

発話(または発話間相互行為)における条件付けの仕方を考察してみると、異なる条件付けの仕方が観察できる。その大別を、著者の研究で「間主観的条件受け(話者間条件受け)」「主体的条件付け(話者内条件付け)」と呼ぶ。これは通常の複文構造の条件構文においても生じる様相であり、談話標識化した場合も同様の条件付けのバリエーションが可能であることが分かる。

5.1 間主観的条件受け(話者間条件受け)

条件文を用いる際、談話・会話における先行発話・先行文脈で提示された内容を受けて、前件が先行発話・先行文脈の内容に言及し、その内容を前提に後件の発話(疑問や依頼や言明等発話行為を伴うものが多い)が提示されることがある。まず、通常の複文構造の条件構文でのこのような発話を(14)に例示する。

(14) H: 明日サンフランシスコで会議。 ジャパン・タウンで食べようかな。

E: サンフランシスコにいくんだったら、紀伊国屋で本買ってきてくれない?

(14)の話者Eの発話は、話者Hがサンフランシスコに行くこと(ほぼ確実な予定)を明示的に知らされた直後に、その計画に条件構文前件で言及しているのであって、かなり蓋然性の強い事態として受け止めた上でのことである。その前件事態に対する認識的態度としては肯定的な態度であるにも関わらず、このような文脈での発話においては条件構文を使用することが多く、特に日本語では名詞化した前件形式「[S]のだったら」「[S]のなら」を使用するのが自然である。この際の前件事態は、話者以外(会話の聞き手)から会話場で与えられた内容であり、話者は他者から受けた情報を前提にしていることを言語化しつつそれを前提にした発話行為を後件で発話している。このような条件付けの様相を「間主観的条件受け(話者間条件受け)」と呼ぶ。

(15) H: 明日サンフランシスコで会議。 ジャパン・タウンで食べようかな。

E: だったら、紀伊国屋で本買ってきてくれない?

さて、この同様の「間主観的条件受け(話者間条件受け)」の発話を、(15)に示すように「だったら」のみで言及することも可能である。先に3節で、「だったら」の基盤構文として「[指示詞]だったら」をあげていたが、「[S]のだったら」構文も「だったら」の重要な基盤構文である。ここで重要なことは、談話標識化した「だったら」の条件付けの様相が、その基盤構文「[S]のだったら」構文のそれを継承していることである。先に3節の(3)(7)で例示した「だったら」「そうだったら」も同様に「間主観的条件受け(話者間条件受け)」で用いられている。

5.2 主体的条件付け(話者内条件付け)

一方、発話者内(筆者内)で条件付けを行う発話も多い。特に、語用標識化・談話標識化している条件構文のうち、4節でSpeech act modifier, Rhetorical connectorとして提示した類型(例11)では、話者が後件で提示しようとしている発話行為や言明や認識的判断・結論をどのように解釈して欲しいかに関して話者自身が注釈を述べているわけで、その条件付けは主体的であり話者内(話者内発話、話者内思考)において成立しているものである。

5.3 談話標識「だったら」: 発話(間)相互行為における条件付けの仕方

BCCWJにおいて文頭・発話冒頭で談話標識として用いられている「だったら」907事例³すべてに、(i)間主観的条件受け[話者間条件受け]か(ii)主体的条件付け[話者内条件付け]かに関するコーディングをしたところ、907トークン中、43%(386例)が間主観的条件受け(話者間条件受け)、57%(521例)が主体的条件付け(話者内条件付け)であった。さらに、前文脈の発話機能を分析したところ、後者主体的条件付け521例のうち、38%が質問や確認問かけ発話であった。

³ 表1では文頭・発話冒頭の「だったら」が916例抽出されているが、一例ずつ文意・形式を読み取ったところ、9例は曖昧なケースや誤解析であったためこの分析からは除外した。

6. まとめ

本稿では、条件構文基盤の談話標識化・語用標識化の諸相を、現代日本語書き言葉均衡コーパス(国立国語研究所)や、日本語話し言葉コーパス(同)や会話コーパスを用いて分析するために指標としている(発話冒頭で使用される)条件構文の形式的類型、共起語彙群、意味・機能的類型、条件付けの様相を考察した。長単位・語彙素に関する議論の種にもなれば幸いである。⁴一方、類型や体系付けや全体像の中での位置付けに加えて、談話標識事例一つ一つが詳細かつ綿密な分析(例えば、孫、山田等)を必要としている対象であることは申し添えるまでもない。

これらに関するコーパスを用いた分析を行うにあたり様々な研究問題・仮説が念頭にあるが、それらの中から、本稿1-5節で言及する紙幅のなかった問題を2点以下に挙げる。

A. 書き言葉・話し言葉(異なるレジスター・ジャンル)において談話標識・語用標識として用いられる条件構文の使用傾向: BCCWJ, CSJ, 友人間自由会話という三種のコーパスを分析してみると、談話標識・語用標識として用いられる条件構文の出現傾向が大きく異なることが分かった。BCCWJ内でも、異なるジャンルを比べると、出現傾向が異なる(表1参照)。

B. 基幹語彙と談話標識・語用標識の機能的特徴との関係: 談話標識化・語用標識化に関する本研究は、談話における相互行為とダイナミックな文法使用の視点から行っているとともに、「語彙と構文」の観点からも興味深い。例えば、動詞等述語を含む合成型では、言動系(特に「言う」系)語彙、及び、思考・認知系語彙が顕著な共起語彙群である。これら共起語彙群の語彙の意味は談話標識としての機能的特徴(特に発話行為条件付け、認識条件付け)に寄与している。

謝 辞

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究「構文理論・用法基盤アプローチによる語彙と構文彙の統合的研究」(平成22~25年度, 研究代表者: 藤井 聖子) による助成を得ています。

参考文献

- Fraser, Bruce (1996) Pragmatic Markers. *Pragmatics* 6(2): 167-190. International Pragmatics Association
- Fujii, Seiko Y. (1995) Mental-space builders: Observations from English and Japanese conditionals. In Shibatani, Masayoshi & Thompson, Sandra (eds.), *Topics in Semantics and Pragmatics*. Philadelphia/Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 72-90.
- Fujii, Seiko Y. (1995-97) Conversations in Japanese: 34 pairs of casual dyadic conversations.
- Onodera, Noriko (1995) Diachronic analysis of Japanese discourse markers. In A. Jucker Historical Pragmatics. Pragmatics Developments in the History of English, Philadelphia/Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. 393-437.
- Schiffrin, Deborah (1987) Discourse Markers. Cambridge: Cambridge University Press
- Sweetser, Eve. (1990) *From Etymology to Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, Elizabeth C. and B. Heine. (1991) Approaches to Grammaticalization. Philadelphia/Amsterdam: John Benjamins Publishing Company
- Traugott, Elizabeth C. (1995) The role of discourse markers in a theory of grammaticalization. Paper presented at the 12th International Conference on Historical Linguistics, Manchester.
- Traugott, Elizabeth C. (2004) Historical pragmatics. In L. Horn and G. Ward (eds.) *The Handbook of Pragmatics*. Oxford: Blackwell. 538-561.
- 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』(2008版、2009版、2012版)
- 国立国語研究所『日本語話し言葉コーパス (CSJ)』(2004版、2013版)
- 孫羽 (in progress) 『「那 nà」と「だったら」の対照分析』(仮) 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻修士論文 (進行中)
- 藤井聖子 (2008) 「話しことばの談話データを用いた文法研究: 話し言葉で構文機能が強化する? — 「〜ないと」「〜なきゃ」「〜なくちゃ」の文法—」長谷川寿一・伊藤たかね・C. ラマール (編) 『心とことば—進化と認知科学のアプローチから』, pp. 129-151, 東京大学出版会
- 藤井聖子 (2012) 「条件構文をめぐる」澤田治美編『構文と意味』pp. 107-131. ひつじ書房
- 山田彬堯 (in progress) 『「そういえば」の分析からみた談話管理理論』(仮) 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻修士論文 (進行中)

⁴ BCCWJにおける単位認定は、コーパス構築段階で様々な要因が考慮され一貫性(かつコアデータからの学習可能度)を優先課題として確立された賜物であるが、本稿で扱った談話標識化に係る現象はBCCWJのような均衡大規模コーパスが完成して新たな分析・検討が可能になる問題でもあるだろう。